

- 1946年 江原道内雪嶽(내설악) 生まれの長男。  
1964年 春川高校卒業。  
1976年 江原日報新春文芸に詩当選。  
1969年 慶熙大学校英文科入学。暗く挫折した学生時代を送る。  
1971年 秋に위수령(衛戍令)で閉鎖された大学の講義室に隠れ小説を書き始める。  
1972年 東亞日報新春文芸に小説当選。作品「四月의 끝」短編「待雪賦」発表。  
1973年 韓国日報に長編「해빙기의 아침」入選。  
1977年 民音社「오늘의 作家賞」受賞。

散文詩のように柔らかい文体の中に、時間と生命との相関関係、生命の価値の探求を描く作家として評価されている。

#### 登場人物

- 나・・電子工学部の大学生。自宅住まい。母、妹と同居  
그녀・・兄の恋人。顔は色白。手は長くて黒っぽい。会社員  
兄・・建築家。夏に建築現場から転落死する。音に対し異常なまでの反応

#### あらすじ

##### ① (P378~P381 20行目)

- ・12月。雪が降りそうな雲行きの日午後。그녀から手紙をもらい、나는、母の実家がある郊外の町の駅で그녀を出迎える。나는、駅で列車を待つ間、그녀と会うのはこれで最後にしようと思決心するが、그녀が初めて見せる明るい笑みと行動に戸惑ってしまう。
- ・그녀との付き合いは、兄が夏に転落死し、兄の死を封印しようと思あがいていて過ごしていた秋の終わり頃に、나의研究室へ그녀が訪ねてきたことから始まった。

##### ② (P381 21行目~P382)

- ・나는、그녀が研究室を訪ねてきて来た時のことを思い出す。그녀は陽の光に包まれ、まるで後光が差しているように見えた。「挨拶しろよ。俺の知り合い」と兄の囁きが聞こえる。그녀の白い肌、黒っぽい手。「女は男という一人の人間を愛するのではなく、ただ男が作る雰囲気を楽しんでいるだけだ」という兄の女性観を思い出す。

[テキストを入力]

- ・兄の死がきっかけでの出会いは嫌だと別れようとするナに、グニは兄の死は自殺ではないかと疑問を投げかける。

③ (P383～P386 24 行目)

- ・ナは、グニに対する兄の想いを知りたくなり、兄のノートを読み始める。「明日、絶対丘の上の教会行くこと」というメモを見つけ、教会に出向く。神父から、4月に、眠れないから鐘を鳴らさないでほしいと頼み来たので、教会に通うことを勧めたら怒って帰ったという話を聞く。
- ・ナがグニに会いたいと思っていたところ偶然再会した。そのときグニは兄が現実には耐えられず死に囚われたのだと言われ、その考えを否定し笑い飛ばす。

④ (P386 25 行目～P389)

- ・公園に着くと明かりがちらつく薬水壺を見つけ、急な山道をナはグニの手を引いて降りて行く。薬水壺は静かで、ナは落ち着かない。グニが女は一人の男を学んで成長するのだと語るが、ナは、それは誤解と同情が愛かもしれない、愛は信じられないとこたえる。
- ・兄が精神分裂を引き起こしていたのではと、バスの中での出来事をグニは思い出す。自殺なのか、それとも事故なのか。グニは兄を失って全てのことが偽りだと思ったが、いつの間にか兄と過ごした日々が生き生きと蘇り宝石のように輝きだしたこと、兄はもう一人の自分だったこと、今日が兄に初めて出会った日だと打ち明ける。
- ・ナもグニのように、他人と融合できるのか。それなら自分の城を打ち壊したいと思い、グニへの思いを認める。

感想など

- ・성、해자・・・城、堀
- ・自分の知っている兄と死に至るまでの兄（現実）を受け入れるまでの心の葛藤
- ・兄への憧れ。他者を受け入れることへの抵抗から受容へ。ナの心の変化。
- ・兄の恋人への恋心
- ・主人公の心情の表現が詩的で理解しづらい。